

【講演】

「評価以前の準備活動」

国際教養大学 教授 内田浩樹

1 テストについて考える前に

最近、評価が話題になっていて、「アウトプット評価をどうしたらいいか」とか、「指導と評価の一体化の具体的な評価方法にはどういうものがあるか」、といったことを相談される。国際教養大学では全ての授業を英語で行っている。入学すると学生は最初に英語集中講座を受講して、英語で授業が受けられるように訓練される。そうすると、授業をしたらしゃべる生徒、しゃべらない生徒、この子は書くし、この子は書かない、など明白に分かれる。どのような尺度で評価するかはもちろん作るが、評価について悩むことはない。なぜ高等学校でアウトプット評価を悩むかというと、誰も書かないし、誰もしゃべらないから。つまり実態のないものを計ろうとしているのが原因ではないか。

2 外国語を学ぶ上で4つの strands

- Language -Focused Learning
- Meaning-Focused Input
- Meaning-Focused Output
- Fluency Development

Language-focused Learning は新出単語、発音や文法など新しい言語項目に出会って慣れていく活動のこと。Meaning-focused Input と Meaning-focused Output を合わせて Meaning-focused Learning という。これは過去に習って身につけているものに何度も触れる活動のこと。割合としては Language-focused Learning 50%, Meaning-focused Learning 50% であるべきだが、実際の英語教育の教室を見ると Language-focused Learning で90%以上を占めている状態。英語で授業をするというのは、Meaning-focused Learning, 特に Input を増やすということ。過去に習った言語項目に繰り返し出会うこと。反復がすごく大事だが、この部分が日本の英語教育には欠けている。正確さはもっぱら Meaning-focused Learning の中で身につけていく。使って間違えて、直して、という過程で Fluency や Accuracy が成長していく。

3 Solutions to the Problems

教師がよく「辞書を使わずに文脈を推測してみよう。」と言うが、全体のパラグラフの98%ぐらい分らないと推測できない。スライドに $i + 1$ と書いてあるが、これはクラッシュェンの考え。 i は生徒の今の英語力で、それに1足したぐらいの教材で教えていくと、言葉というのは身につくという仮説。98%わかるもので、2%知らない単語や文法が入っているものを与え続けていけば実はほとんど想像で分かる。ところが日本の教科書は $i + 10$ だったり $i + 50$ だったりする。だから辞書なしでは絶対に理解できない状態が続く。そうすると生徒は、辞書がないと分からないというふうに刷り込まれるし、先生が教えてくれないと分からないとなる。易しい教科書を2, 3冊やったらいい。

そうすると Input 量が増えるので、Meaning-focused Learning が増える。コミュニケーションな授業をしたければ易しい教科書でないとできない。

4 Proficiency Test と Achievement Test の違いを理解する

Achievement Test (達成度テスト：指定した言語項目をどの程度身につけたかを測定するテスト) と Proficiency Test (運用能力テスト：生徒の英語力が現在どのレベルにあるかを測定するテスト) がある。

知識単独ではなく、常に Context の中で出題することがすごく大事。

普段のテストでも初見の英文を出すこと、初見の英文を出題すること。教科書の文をそのまま出すのは、生徒が自分で読むことをできなくさせている。高1の段階から長文は初見のもので出題する。易しい文だけ出していたらよくできる子が退屈してしまうからというのが、2題出せばいい。1題はみんなができるように易しいものを出して、もう1題はちょっと難しめのものを出せばいい。

先生方が作られるのは Achievement Test。Proficiency Test は膨大なデータと経験が必要なので無理。単語テストをやるときは必ず文の中で出す。大変だけど、生徒が分かる範囲の良い例文を作ることが大切。

5 配点と得点について

なぜ単語が1点なのか？易しい問題に高得点を与える、絶対覚えて欲しい問題に高得点をあげてほしい。新出単語をA（絶対覚える）からC（このレッスン終わったら忘れてもいい）とランク分けして教えて欲しい。少なくともAだけは覚えるようになり、もっとやる気になる。これは絶対に出るというもので40点くらいとれるテストを作る。大事なものを、絶対覚えて欲しいものに高得点を、どっちでもいいものには低い得点、というのが基本。

我々は配点に責任を持たなければならない。印象論で配点を決めてはいけない。学校のテストは心理的にもっと勉強しなきゃなど、もっと勉強したいと思わせる仕掛けが必要。

6 クラスルームイングリッシュの例

最初の段階は、教師は英語で話すが生徒は日本語で応答しなくてはならないというのをちょっとやってみましょう。なぜこれをやるかには2つ理由がある。1つは、先生が英語でやって生徒も英語でやるようにすると、英語が得意な生徒が支配してしまう。もう1つは、英語で話すと生徒の反応が急になる。だから質問がないのか、こっちが言っていることも分かってないのか、判別できないので、こちらは英語で話して生徒は日本語で反応しなさいとなると、分かっているかどうか分かる。そして質問もしやすい。次に、こちらは英語、あなたたちも、できたら英語でもいいよ、と許してあげる感じ。その次に英語で答えてね、という風にしていく。1つ覚えておいていただきたいのは、corrective feedback あるいは recast というのですが、例えば He like tennis. と生徒が言うと教師が Oh, he likes tennis. と言って、その人に修正するのではなくて、みんなで正しい文をリピートさせる、そうすると、その子の間違いではなくなる。特に、生徒が1人間違えたら、それはだいたいクラス全体で間違いうる間違いだと考えて全員にリピートさせる。まずポジティブに受け止めて、反応してあげて、

そして recast する，ということを試しにやってみてください。

7 様々な活動例

(1) Guess What?

言いたいことが言えないというのは，one on one match なんですよ。秋田はかまくらで有名ですが，「先生，かまくらって英語でなんて言うんですか？」「かまくら だよ」「一緒なんですね。」という感じになる。知らない単語があつたら止まらなくていい。Guess what? という活動は英語でいえないような「扇風機」とか「台風」とかお題を与えて，その特徴を日本語でたくさん文で書かせる。

(2) Say It in English

単語ではなく，意味を考えて，意味を考える練習をすることが大事。例えばこういう練習です。「私はオンチです」英語にする際，オンチってどんな人？ I can't sing well. とか I'm not good at singing. I'm a bad singer. みたいな言い方でもいい。100%をうつしだくのではなく，だいたい伝えればいいというゆるやかさがコミュニケーションには必要。

(3) Ask Plus Answer Plus

例えば，Where are you from?と言われて I'm from Akita.と言ったとき，次に Do you like Chinese food?ではなく，5 W 1 Hを使うことで会話が続いていく。Have you ever traveled abroad? I have traveled in Europe. What, Who, When,などを使って質問を考えてみる。そうすると What did you do in Europe? とか What country did you visit in Europe? Who did you go with? などいろいろ出てくる。

今度は相手が言ったことに質問ばかりするのではなくて，自分が答えるときもWHを使って同じ手法を使う。こういうふうに質問してまとめていくと1パラグラフぐらいになる。つまりそれは，Writingにも使えるということ。

8 主体的に学ぶために

grammar consciousness raising task (GCR) は，全部の文法でできるわけではないが，正しい文と間違っている文を提示して，どうしてこっちが正しくて間違っているかを考える。考えることによってその本質が分かってくる。GCRをやるときは基本ルールがあつて，日本語でもあることしかできない。関係代名詞とかはだめです。日本語にないので。現在完了も結構難しい。せっかく be 動詞があるんだから，疑問文のときは前に持ってくればいいわけだし，否定文のときは not をつけたらいい。それを be + 過去分詞みたいに形から教えてしまうと、てっとり早いけど、定着は遅くなる。理解してないから。こういう風に考えていくことが大事。私の、宝くじ理論？といって、宝くじの当選番号チェックしたことある？ つまり宝くじの当選番号は買った人しか興味がない。それと同じで、授業に宝くじを買う場面、つまり、考えてこうじゃないかな？と思った瞬間、宝くじを購入するようになる、で、答えは？て興味がでる。さっきのGCRと同じで、なんでこっちが正しくてこっちは間違いかと考えて、私はこう思うと思った瞬間に、「先生答えはなあに？」となると宝くじ買った状態になる。いきなり宝くじも買わせないで、「はい、今日は受け身やるよ、受け身っていうのは何々さ

れるっていう意味です。be + 過去分詞って言ったときは」, というのはいきなり当選番号を見せられているようなもの。そういう工夫が大事。

9 人はなぜ学ぶのか

人が学ぶ理由は2つ。①必要だから（四則演算 vs ドレミ）、②楽しいから（テニス）。

私たちが英語の学習を生徒達に満足にさせたいとき、英語を必要な状態にはおけないので、やっていて英語が楽しくなるように工夫をしていきたい。生徒を主体的に動かすのではなく、日頃の授業に宝くじを買う場面があってわくわくしながら当選番号を見に行く仕組みがあるという発想で授業をつくる。

新出単語も私はこういう形で導入している。いきなりこの単語はこういう意味ですとはやらない。文脈の中で教える。ここはどんな単語が入ると思う？思いつかなかったらプラスのイメージ？マイナスのイメージ？これは単語を推測する練習にもなる。だから小テストのときもやる。こういったことを普段授業のなかでずっと並べてやっていて始めて英語で授業ができるし、コミュニケーション活動ができるし、生徒の Output の場面が出てくるので、私はだいたい4月5月は教科書をせずに徹底的にこれをやる。言語教育はチームです。先生一人ひとりにまかせては絶対にうまくいかない。どれだけ意思統一ができるかが勝負。



内田先生の講演の様子